

【多摩丘陵・私の出会った生き物たち 3】

< 絵描き虫見つけた！ >

桑原紀子

紫のハナダイコンが咲いています。何枚かの葉の表面に、不思議な白い模様がついていました。線画のような、幼児のいたずら書きのようなのです。裏返してみると、裏にはついていません。

初めて見つけた時、その線画模様が面白く、探してみると木や草の色々な種類の葉っぱについていて、模様も個性的でした。

その内に、この傑作が、実は小さな虫の仕業だという事がわかりました。虫が葉っぱにつけた模様が、絵のようなので、絵描き虫という可愛い名前前で呼ばれていますが、本当の名前は潜葉虫（英語ではリーフマイナー）といいます。一種類ではなく、幼虫時代を葉の中に潜って過ごすものの総称で、ハエや蜂、甲虫、蛾などがいます。

葉っぱに母虫が産卵し、孵化した幼虫は葉肉を食べながら、葉の中を炭鉱夫のように掘り進んでいきます。幼虫の辿った跡が、白い航路のようになって残るのです。葉を日に透かしてみると、航路の中に点々と小さな黒い

糞があり、食べ進んでいる幼虫がいたりします。

航路は、始まりは糸のように細く、体が大きく

なるにつれてだんだん太くなっていき、やがて途切れます。その辺りを触ってみると、プクンとした小さな手ごたえ。蛹になっているのです。羽化後、虫は初めて外の世界に飛び立ちます。

このような生き方は、鳥などに狙われにくく、公害汚染にも強いという利点があるという事ですが、いつか私は、絵描き虫の葉の上を行ったり来たりしている小さな蜂の姿を見かけました。盛んに触角

で葉の表面を叩いています。その内、蜂はお尻の針を葉に突き刺しました。音の反応から虫の存在をキャッチして産卵した寄生蜂だったのです。やはり虫の世界も絶対安全な生き方はないようです。

絵描き虫の作品は、庭や林や野原の葉の上で見られます。命溢れるこの小さな芸術作品を鑑賞しながらの春の散歩は、お勧めです。

